
当たり前の行動（嘘）

十歌龍太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

当たり前の行動（嘘）

【Nコード】

N7201N

【作者名】

十歌龍太

【あらすじ】

僕のただの初恋話。間違っている要素は一つもない。あるとすれば、それは僕と彼女以外のすべてだ。

（前書き）

こんな友達が一人はいてもいいと思う、今日この頃。

僕が好きだった女の子の話をしよう。

彼女はごく一般的な女の子だった。女の子のテンプレートのような、もしくは彼女が女の子というものの原型になったのかもしれない……とバカなことを考えてしまうくらいに一般的だった。

名前は前見祐まえみゆうといい、きれいでとても言いやすい。

本を読んでいることもあるけれど、基本的に友達と楽しく笑いながら話していることが多い。

彼女の周りは、いつでも人がいた。

一つ、彼女がほかの同年代の女の子と違ったのは、彼女が一般的過ぎたことだ。

「女の子」という枠からぶれずにずれずに、女の子の役割を、演じているような錯覚を受けるほどに。

彼女と僕の通学路はほとんど同じだったので、たまたま見かけることはあった。けれど僕は奥手で、クラスが一緒の彼女と話したこともなかったために並んで帰るなんていざ知らず、後ろのほうで歩きながら視界に入る彼女で満足していた。

彼女のやることなすこと全てがまるで運命によって元から決まっていたかのように自然で、自然過ぎて、その不思議によって僕は彼女に惹かれていった。

そんなゲームのnpcのような彼女が、ある日トラックにひかれて死んだ。

その瞬間を、僕は近くで見ていた。

通学路をいつものように歩いていた僕は、彼女が前方に歩いているのを発見し、いつものように静かに視界の隅に彼女を入れていた。彼女は短い道路を赤信号で渡ろうとして、死角になっている道を右折してきたトラックに轢かれたのだ。車の騒音、肉が潰れたような骨が砕けたような音、人々の話し声や生活音。それらが自然と耳

に入ってくる。

彼女の死の音は、あまりに自然に耳に入ってきた。こうして死んでしまうことが、さも当たり前のような感覚に陥った。けれど僕はその考えを振り切る。そして彼女の死について考える。彼女が轢かれそうな時、彼女はこちらを見ていた。あの頃の僕は彼女の口の動きから、何を話しているのかを理解できるほどにまで至っていた。痛いだけかもしれないけど。

しっていたよ

彼女は僕の目を見て言っていた。

表情は、見ていない。

そしてまた考える。

ナニカガ、オカシインジャナイカ。

ナニカワカラナイナニカガ、クルツテイルンジャナイカ。

ナニガオカシイノダロウ。

考えが燻り、心が濁って、イライラが募り、無力感に押しつぶされる。

僕は、何をやっているのだろう。

彼女の葬式の日になった。クラスメイトは僕以外誰も来なかった。親族も、母親だけだった。その母親も早々に携帯片手にタクシーでどこかへ行ってしまった。僕は一輪の紫色のサイネリアを買ってきて、彼女の棺桶の中に入れた。

雨の中一人、とても寂しい淋しいお葬式だった。

その日の晩に電話がかかってきた。僕と仲の良いクラスメイトだ。皆僕を心配しているという。僕を 心配しているという。

次の日から僕は学校に行かなくなった。クラスメイトに会うのが怖かった。

誰も前見祐の存在を覚えていないかもしれないと考えてしまったから、学校は僕の敵になった。

おかしい

なぜ彼女はこんな目に逢わなければならぬんだ。友達にも親戚にもぞんざいに扱われて、ほとんど誰にも知られることもなく、生きていたのか死んでいたのかも意識されない。

彼女は生きていたのだろうか。ある本では人々の記憶から消えた時に人は死んでしまうのだそうだ。その理論では彼女はもう死んでいや、僕が残っている。僕は覚えている。僕は知っている。彼女は決して死なない。僕が覚えているのだから

彼女を救いたい。彼女を元に戻したい。死にかけの彼女を救う方法を、考えることにした。そして

カンガエルコトヲ、ボクハヤメタ。ムネニ、キキヨウヲダキナガラ。

事故から二週間後、僕はクラスメイト全員を持ち込んだ包丁で殺した。殺したことに對する感想は何もない。僕の計画に必要なだから殺した。それだけ。

教師に取り押さえられる。そんなことなどお構いなしに僕は叫ぶ。「前見祐を思い出せ!!!」
続ける。

「前見祐を思い出せ！！前見祐を思い出せ！！前見祐を思い出せ！！
！前見祐を思い出せ！！前見祐を思い出せ！！前見祐を思い出せ！！
！前見祐を思い出せ！！前見祐を思い出せ！！思い出せ！！思い出
せ！！思い出せ！！思い出せ！！思い出せ！！思い出せ！！思い出
せ！！思い出せ！！思い出せ！！思い出せ！！」

そして渾身の力を喉に籠めて叫ぶ。

「前ええええええ見いいいいいいいいいいいい
いいいい祐つつつつつつつつつつつつつつを
ををををををおおおおおおお！！！！！！！！」

「！！！！！！！！！！」

そして僕は、**警察署へと連れて行かれた。**

僕は何か悪いことをしたのだろうか。この世界が、クラスメイトが、悪なのであって僕は正しいことをした。それは揺るがないはずだ。

世界は、世間は、きつと前見祐を思い出しただろう。ということ
は前見祐は生きている。良かった。めでたしめでたし。

……あ、そうだ。前見祐の母親を殺すのを忘れてた。ここから出たら、真っ先に殺しに行かないとね。

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7201n/>

当たり前の行動（嘘

2010年10月10日05時55分発行